成願寺

季報

113

平成29年6月18日
(2017年)

目次

「道元禅師の真意を学ぶ」井上貫道……1
春の観音詣りの報告・感想文紹介……8
中野たから幼稚園の教育・今……11
山内短信……12

発行　多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話　03-3372-2711
制作　地人館

平成二十八年一泊坐禅会 提唱

道元禅師の真意を学ぶ

静岡県少林寺東堂　井上貫道

こんばんは。これから一時間ほどお時間を頂戴しまして、本日は一泊坐禅会でございますので、坐禅を修行するのに役に立つのではないかな、というお話をさせていただきます。

曹洞宗の開祖道元禅師様は「普勧坐禅儀（ふかんざぜんぎ）」という坐禅の指南書を遺しておられます。日頃から坐禅に親しまれている方でしたら、よく読まれていると思います。永平寺に所蔵されている国宝の「普勧坐禅儀（ふかんざぜんぎ）」、これは道元禅師様の真筆で、天福本と呼ばれています。実はこの天福本にはあって、みなさんが日頃より読んでおられる流布本には無い文章がございます。

静岡県少林寺東堂
井上貫道老師

盂蘭盆先祖まつり（おせがき）のお知らせ

七月十一日（火）朝十時半　受付開始
十二時半　開山・歴住諸大和尚報恩供養
午後一時　説教 兵庫県般若林八王寺 志保見道元老師
午後二時　先祖まつり法要・檀信徒総供養
＊東京近郊は七月十三日～十五日がお盆です。その間、寺から檀信徒各家へお棚経に伺います。これまで伺っていないお宅で棚経をご希望の方は、寺務所まで早めにお申し込みください。

秋の観音詣り…十一月九日（木）よりの一泊で静岡県の霊場を巡拝します。詳細は次号にて。

ます。本日はその元々天福本にある三つの文章に注目し、その内容をお話してまいります。

早速一つ目の文章を見てまいります。これは冒頭のほうで出てまいります。

須く知るべし、
歴劫の輪廻、還って擬議の一念に因る、
塵世の迷道、覆た商量の無休に由る。
向上の徹底を超えんと欲せば、
唯だ直下の承当を解すべし。

これはどういうことかと申しますと、坐禅の時に、いま自分の中で問題になっていること、気にかかっていることを思い起こして、ああだった、こうだった、どういう事なのか、どうすれば良いのかと、思慮分別を使って探ってみたり、詮索したりしている。そうしたことを止めなければ、坐禅にならないと言っておられるのです。

みなさんには、ご自分が坐っている時のその内容を思い返してみていただきたいのです。坐禅の際、どういうふうにして過ごしていますか。作法通りの形で坐っていますけど、それは外身だけです。それだけで坐禅をしていると思ったら、ちょっと的外れなんですね。坐った時に、どのように過ごすかということが、重大な鍵なのです。この重大なことが、一般的には、不明確。問われていないのです。

考えてみますと、足を組んで、背筋を伸ばして坐るなんてことは、そこにテキストでもあれば、難しいことではないんですね。誰でもできます。それで一時間こうして坐っていれば、坐禅をしたことになるのかと言えば、そういうことでは無いんですよ。

ここで先ほどの文章を見てみますと、最初に、「須く知るべし」、是非とも知るべきだと断った上で、「歴劫の輪廻」、無限とも思える長い長い間、あれこれと思い計ることにより、「還って擬議の一念に因る」、決択がつかずにぐるぐるぐるぐる廻っている。「塵世の迷道」この汚れた世界で道に迷っているのは、「覆た商量の無休に由る」、条件、種々の状況などを計り、考えることが休まないからだ。

「擬議」というのが、ああだった、こうだったとくよくよと思うことです。「商量」というのは、商いという字に量るですから、値踏みをするようなものでしょう。例えば、畑で育てた大根などは値段が付いていないでしょう。それを抜いてきて、作り手と買

い手が量り合って、いくらにしましょうと値段を決めるようなことが商量。お寺の世界で商量というのは問答のことといって良いでしょう。そういったことをいつまでもやっていると、決択がつかないんですね。

結論としては、「向上の徹底を超えんと欲せば」、これは、本当にどうあるべきかと言えば、「唯だ直下の承当を解すべし」というのです。

ここで、参考文献として同じく道元禅師様の示された「学道用心集」の第十に「直下承当の事」という項がございます。これを読んでみますと、理解できるのではないかと思うわけです。直下というのはいまのことです。承当というのは、そのとおりに受け継いでいくということです。

右。
身心を決択するに、自から両班有り。
参師聞法と、功夫坐禅となり。
聞法は心識を遊化し、坐禅は行證を左右にす。
これを以て佛道に入るに、
なお一を捨てて承当すべからず。
夫れ、人は皆身心あり、作は必ず強弱あり。
勇猛と昧劣となり。
また動、また容、この身心をもって、
直ちに佛を証す、これ承当なり。
いわゆる従来の身心を回転せず、
ただ他の證に随い去るを、直下と名付くるなり。
承当と名付くるなり。
ただ他に随い去る、ゆえに旧見にあらざるなり。
ただ承当し去る、ゆえに新巣にあらざるなり。

こうした一文でございます。まず決択を着けるということですが、これは、手放しで安心できる状態になること。疑いが残らないことです。そういう状態になるためには、「参師聞法」、師に付いて教えを聞く。そして、「功夫坐禅」、教えられたことを実践するという二つのことが必ず必要だという。「なお一を捨てて承当すべからず」、どちらか一方だけでは、ことは成就しません。

本当の意味での理解というのは、頭でわかっただけでは難しいですね。実践する、また実際に触れてはじめて得心がいきます。例えばトマト、文章をよく読んだり写真を見れば、赤い色だとか、どんな味なのかとか、一応の理解はできる。だけど実物のト

マトを見て触って食べてみると、直下、いきなり誰でもはっきりします。理解の仕方がぜんぜん違う。本物に直面すると、理解でなしに得心がいくようになっています。われわれも修行をしていますと、必ず同じようなことになる。

そもそも最近の仏教、禅というものが、思想に落ちてしまっているように思えてなりません。ちょっと勉強して説明ができると、それらしく見えてしまう。それでは頭で一応の理解をしているだけ。本来はそういうものではないのです。

修行とはどうすれば良いのかが、はっきりしないでいるから、坐禅をしていてもいつも気にかかる。あの本にはこうして書いてあった。あの人はこんなことを言っていた…、そう自分の中に疑問がわき起こり、坐っている間中、自分の中の考え方というものを相手に時を過ごしてしまう。これでは坐禅とは言えません。

坐禅がなぜ尊い行(ぎょう)かと申しますと、普段の生活と時の過ごし方がまったく違うのです。

思えたことでも、考えをつけないとどうなるか。問題が起きません。悩まないし、苦しまない。

悩んだり、苦しんだりしている時は、必ず自分でつまらない考え方を起こした時でしょう。自分の中の思いや考えが自分を苦しめたり、悩ませたりするのではないですか。

では、そういうことをやめたらどうなるか。やめれば、いま生きている自分そのものが出てくるのです。坐禅をすると、必ず本心にふれる。考えや思いではなく、事実・本心。それが坐禅の時に用いる非思量なんですね。

教えられたとおりにできれば、手放しに安心して坐ることができる。すると自分の本心に出会える。自分のこと、自分がどうあるかがゴロッと出てくるのです。自分を知るということは、他の人ではできないのです。

たとえば外の音を聞くのに、それが人の声であったり、車の音かもしれません。そこにはただその音がしているだけです。そこに自分の思いや考えを起こして、うるさいなと思ったら、音を聞いているのではなく、思ったことを相手にしているのですね。坐禅も同じことなのです。坐っている間、思いや考え方から離れて、実物に親しくするのです。そうでなければ、坐禅そのものと違ってしまうのです。

この八日は成道会と申しまして、お釈迦様が悟り

を開かれた日です。では、悟る、とはなんでしょう。一言で言えば、自分自身の本当の有り様を見届けることです。それを自覚と言っています。自らに目覚める。自覚をした人を仏陀と言います。何を悟るのかと言えば、申し上げたように、自分自身の内容なのです。だからお釈迦様も修行をしながら、なにと付き合ったのかと言えば自分と付き合ったのです。

そうでないのならば、立派な図書館にでも毎日通って、書物からただただ知識を得れば良いわけです。そうでなければ、学者さんのところでも行って、貴重なお話をたくさん聞いて、どんどん知識を貯える。一般的には賛嘆されるわけです。頭が良い、利口であると言われる。

でもお釈迦様はそんなことをしていないんですよね。くる日もくる日も自分自身と向き合った。自分自身の有り様、知識や考え方ではない、まっさらな自分自身に触れておられた。そして自覚されたわけです。

みなさん、自分の中に疑問が起きた時に自分でその疑問に応えていたら、まさしくそれは自己流になりますよ。自分の都合の良い応えを自分で用意する。それで良しとしてしまう。でも仏道とはそういうものではないのです。そういうことから離れないと、いつまでたっても本当の意味での得心がいかない。

「人は皆な身心あり」。これは身と心とは読みません。身心で一つです。身体だけで生きている人はいません。心だけで生きている人もいません。必ず一緒にあります。西洋の学問では身と心を分けるようになった。だけど実際に、どこまでが身体の様子で、どこまでが心の様子と生活していて分けられることではないのですね。「作は必ず強弱あり。勇猛と昧劣となり」。これは、これから一時間坐禅をしましょうと言った時、余裕で坐っていられる人と、疲れ果ててしまう人といます。一生懸命に取り組める人とそうでない人もいる。道元禅師様はどちらが良いとは言っておられません。その各自のそのままで修行ができる。「この身心をもって」、仏道を学ぶ。それ以外にはないのですね。

このことは、考えてみたら当たり前なんですね。みなさん、今日までどう過ごしてきましたか。この地球上にはすごい数の人が暮らしていますが、生まれてこのかた、ずっと自分の目でものを見てきましたね。他の人の目を借りて見たことはないでしょう。耳だって、良く聞こえるからと、他の人の耳を借り

て何かを聞いたことはないでしょう。自らの身心で、ものを見て、音を聞いてきた。生涯そういうものですね。

人は、他人の事をやった事は一度もないのですよ。そんな事はないと思われますか。誰かが、これやっておいてと人に頼む。頼まれた人はその人のためにやってあげたと思う。だけど実際には、私がやったのです。頼んだ人がやったわけではないでしょう。この頭が、あの人に頼まれたことをやってやったと思っていても、真実としてはそんなことはありませんね。この身心がやったのですから。だけど、頭がやってあげたと思っているから、ありがとうの一言もないと腹を立てる。そんなことに腹を立てなくても、生涯自分のことを生きるだけなのです。この身心の活動だけなのです。

いま、私の話を聞いてくださっていますが、それだってみなさん自身の耳が聞いているだけです。考え方として頭で理解するだけです。真実がわかったのとは違いますでしょう。先ほどの話で言えば、今日の内容を実践して得心して、初めてみなさんのものになるのです。

ものを見たり聞いたりして、むかっとする。これはどこに問題があるのでしょうか。見たもの、聞いたものに問題があるのでしょうか。見た目や聞いた耳に問題があるのでしょうか。問題を起こしているのは、自分の頭の中でしょう。日常の生活を振り返ればよくわかりますね。同じような状況になっても、腹が立つ時と立たない時があるでしょう。何が違ってそうなるのか。自分の頭の中の問題なのですね。最初に「擬議の一念」と出てきましたが、これが生きる上で自分自身をそうとう左右してしまうということなんです。

同じように、皆さんは人に言われたことがいつまでも残ってしまう。思い返しては腹を立てている。そこから離れる力がない。だけど、皆さん方の身体を見てご覧なさい。どこにも留まっていませんよ。見たものが目にずっとくっついていますか。聞いたことがずっと耳に残っていますか。

いったいいつ捨てたのでしょうか。見たもの、聞いたものを捨てようと思って捨ててきましたか。なにもしないのに、皆さんの有り様というのはこんなにうまくできているのです。これが皆さんの本心、本来の面目です。皆さんの有り様はこれから修行して作るのではない。すでにできているのに、気付い

ていない。知らないから、頭で色々考えてとんでもない方向に道を求めていくのです。

お釈迦様は自分の本心の有り様に目覚めたのです。ですから普通の教えとはぜんぜん違うのです。道元禅師様はこのことで言葉を遺されています。当時の日本の仏教界への批判ですが、「心外に法を求めしめ」「他土の往生を願わしむ」。ほとんどの教えが、自分のいまの有り様の他に本当のものがあると教えている。これは人を迷わせ乱れさせる根本だ、と。間違いなく誰も、いつでもこの身体といつも一緒なのです。この身体以外で生活できません。仏教とか禅というものが、自分の身体以外にあると思ったら大間違いなのです。

二つ目の文章は、頭に浮かんでしまった疑問や考え方をどう対処すれば良いのかが書かれています。

念起れば即ち覚せよ。
之を覚せば即失す。
久久に縁を忘じて、自ずから一片となる。

坐禅をすると、眠ってしまうという人がいます。ときどき、どうしたら眠くならないのかと聞かれます。ごもっともな質問ですけれども、でも、眠っていた、と自分で気がついたら、その時に寝ている人はいません。寝ていないということは、解決しているということです。だけど人間の頭はそうは思わないんですね。今はそうだけれども…とすぐ言うんです。これから先、また寝るかもしれないと心配するんです。思いを相手にすると厄介なんです。「之を覚せば即失す」。探し物でも見つかると、物事を考えたり、思い描く「念」というものはすぐになくなるんです。

最後に坐禅の効用についてご紹介します。みなさん、坐禅は無功徳、何にもならないと教わっている方が多いと思いますが、道元禅師は天福本に六つも効用を挙げられておられます。

四大軽安…物質界を構成する四大元素（人間の身体）が軽やかで安らか。つまり身体自体が坐禅をすると軽くなる、安らかになる。気にするものがなくなったら、楽になるのは当たり前です。

精神爽利…物事に対する気力が割り切れてネチネチしない。ああじゃないか、こうじゃないかといつ

までも考えるのをやめて、本心に触れると、どうあれば良いかわかるわけです。

正念分明…邪念を離れ、物事がはっきりする。

法味資神…仏法の妙味を味わう力を助ける。

寂然清楽…静かで心や行ないに汚れがなく、清々しく簡素でけじめがあり、とけ込める。自己主張のない状態。どんなものでもとけ込むことができる。

日用天真也…日々の生活が自然のままで飾りっ気がない。偉ぶることもない、へりくだることもない。

このような素晴らしい効用が得られると天福本では書かれているのに、なぜ流布本でカットされているのでしょうか。それは、こうしたことを目的にした坐禅を嫌ったからです。これらのことは、坐禅の副産物なのです。本当の坐禅は、思いや考え方から離れて、まっさらな自分と付き合うことなのです。

本日は若き日の道元禅師が示された「普勧坐禅儀」の天福本から、より坐禅に真剣に取り組んでいただければと思い、お話をさせていただきました。

ありがとうございました。　　合掌

＊井上貫道老師の坐禅会が、毎月一回土曜日に当山南書院において修行されています。詳細は当山ホームページをご参照ください。

心ゆたかに過ごした観音詣り

檀信徒　鈴木保彦

去る四月二十九日（昭和の日）、成願寺恒例の「観音奉賛会春のお詣り」に参加した。

はじめに東京練馬区にある蕎麦喰地蔵尊として有名な、浄土宗田島山九品院を参拝。

本堂内部の慈悲に満ちた阿弥陀如来の前で参加者一同で「般若心経」等のお経を唱えたあと、ご住職の法話に耳をかたむけた。この日がちょうど落慶一周年とのこと。金色がまばゆい、美しい本堂内で記念の集合写真を撮り、外にお祀りされているお地蔵様に手を合わせた後、バスにて次の目的地、関東三大弁天のひとつ、真言宗紅龍山東海寺（千葉県柏市）へ移動した。

地名の布施から”布施の弁天さん“として親しまれている。このお寺には鳥居が二つあり、敷地内にお寺と神社が同居する珍しいところである。ここでもご住職のユーモアを交えた法話に心が和み、自然と笑顔になった。

昼食は、民家を改装し、新緑に囲まれた静かな住宅地にある「あずみ野（流山市）」というオシャレなおそば屋さんで、「五観の偈」を皆で唱えたあと、季節の天ぷらの盛り合わせをはじめとする手打ちそばの懐石を

賞味させて頂いた。

さらに、「キッコーマンもの知りしょうゆ館（野田市）」に立ち寄り、しょうゆが出来るまでのビデオを見たあと、担当者の説明を聞きながら工場内を見学した。

キッコーマンは、原料を厳選し、最新の設備、最高の技術でしょうゆづくりをしており、今では海外の工場でも生産されている。帰り際、担当者より”しょうゆ“のお土産を戴き成願寺への帰路に着いた。

何回か参加させていただいたが、今回もとても楽しく心ゆたかな一日であった。この日のために各方面に働きかけて心をくだき、ご準備等に携わって下さった方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

合掌

春の観音詣りの報告

最初に訪れた九品院は、大江戸線の豊島園駅の目の前。通称田島山十一ヵ寺の一つで、元は浅草誓願寺の塔頭として慶長四年に開創されました。現在の練馬の地には、関東大震災によって全山灰燼に帰し、それを機に移転されたとのこと。成願寺よりバスで三十分ほど、豊島園通りより、左右に整然と十一のご寺院が並ぶ参道へ到着。境内には、浅草時代に江戸市中の話題をさらったという「蕎麦喰地蔵尊」がお祀りされていますが、本日のお目当ては玄関先で温かな眼差しを向ける六朝慈母観音様。戦後檀家総代家より奉納されたとのことですが、戦時中満州から総代家に伝わり、のちの調査で六朝時代（二二二～五八九年）のものと判明したそうです。端正なお顔立ち、美しいお姿の観音様にお経を上げさせていただきました。

西方極楽浄土を思わせる荘厳な本堂では、その主、ご本尊の阿弥陀如来様にご挨拶のお経。その後、ご住職の藤木雅雄様よりお説教を賜りました。帰りに境内のお地蔵様もお詣りして、お見送りをいただきながら九品院を後にしました。

バスは都心の渋滞をさけ、外環道から常磐道へと進み一時間ほどで布施弁天東海寺へ。

玄関正面に安置される観音様に読経する一行。

本堂にて阿弥陀如来様・ご住職と記念撮影。

浅草寺弁天堂、江ノ島神社弁天堂とともに関東三弁天のひとつにあげられる布施弁天様。その縁起は古く、約千二百年前の大同二年（八〇七）、弘法大師空海が自ら彫刻し奉った弁財天を本尊に開山しました。現在は秘仏となっているそのお姿は、八臂、つまり八本の腕があり、それぞれの手には、剣、弓、箭、長杵、斧、鉄輪、羂索、宝珠を持って八つの功徳を現しているそうです。それらは、平安な幸せ、物心の豊かさ、学芸の智慧、和合の優しい思いやり、邪悪なるものをこらしめる、災いを防ぎとめる、病をのぞいて心身を健やかに保つ、生活力を増し成功へ導くを表しているそうで、たいへんありがたい現世利益の女神様として篤い信仰を集めているのです。お詣りを楽しみにしつつ、まずは本堂手前の立派な観音堂に導かれ、ご住職の下村法之様にお説教を賜りました。美しい立ち姿が印象的な観音様は聖観音様で、弁天様をお守りしていた東海寺のご住職がこの地に移転されたのを機に一七〇〇年ごろご一緒に引っ越して来られたとのこと。ご挨拶のお経を上げさせていただきました。

続いて総朱塗り、唐風の向拝が華麗な本堂へ。お前立の弁天様はふくよかで、暖かみを感じる笑顔で迎えてくださいました。それぞれにお詣りを終えると本堂前で記念撮影をして、布施弁天様を後にしました。

昼食はそば懐石「あずみ野」。お庭の景色を楽しみながら、季節のお料理と本場信州を思わせる風味豊かなおそばをいただきました。

最後に野田市のキッコーマン「もの知りしょうゆ館」へ。約三百五十年前、江戸幕府が成立して間もなくしょうゆ作りが本格的に始められたそうですが、原料の大豆や小麦は関東平野で収穫でき、また塩は江戸川を利用して船で運んだそうです。しょうゆの消費地である江戸が近いことも良く、多いに栄えたとのこと。ガイドの方に詳しくご案内いただきました。館内のカフェでしょうゆソフトや焼きたてのせんべいを楽しんで成願寺への帰路へ着きました。　了

観音堂にて読経

本堂前にて記念撮影

もの知りしょうゆ館を見学

中野たから幼稚園の教育・今

成願寺付属中野たから幼稚園　園長　渡邊泰江

本園は、文部科学省・幼稚園教育要領に基づき幼児教育を行なっています。「丈夫な体づくり」「仲良しの心・感謝の心・優しい心」の育成を基本理念とし「安全な環境のもと」での保育を行なうことを教育方針に、成願寺の付属幼稚園として、宗教教育を通して「情操豊かな心を育む保育」を実践しています。心を静かにし毎日手を合わせることによって、合掌の心が育ち、思いやりのある優しい心、すべての生命を大切に感謝する心を育む「心が育つ教育」を行なっています。

設立当初からの建学の精神を大切に守りつつ、昨年度から「のびのび・たのしく・あたたかく」を教育目標に定め、園としての理念や方向性を職員間で共有しています。「みんなちがってみんないい」それが個性であり持ち味であると考え、その子らしさを大切に、一人ひとりが持っている良さを発揮し、子どもが安心して過ごせる環境で自分らしく集団の中で輝けるよう、ゆっくりゆったり子ども達の育つ力を信じ、目を配り、言葉に耳を傾け、気持ちに寄り添えるよう日々の保育に努めています。

手を合わせる子どもたち

「人は人とかかわって人となる」と言われています。家庭では経験できない、友だちとの関わり方を知る（ソーシャルスキル）事を大切にしています。トラブルやけんかを体験して、人との関わり方・自己主張の仕方・人の意見の受け入れ方・折り合いの付け方・加減の仕方を知っていきます。互いに自分の思いを言葉に出すことを経験し、その上で相手にも思いがある事に気付き、集団の中で少しずつ自己発揮しつつ自己抑制出来るようになっていくのです。けんかも教育の大切な機会と捉え、なぜそうなってしまったのか？　保育者が仲立ちとなり双方の思いを言語化し、どうすべきだったかを提示するよう導いています。遊ぶことは、眠る事・食べる事と等しく、生きることそのものです。身体能力・知性・感性・社会性など生きる力は、十分な遊びにより育まれていくものです。遊びの中から多くを学び、自立した大人へと成長していく事を願い、遊び込める時間の確保と環境を整える努力をしています。幼児期に必要な非認知能力と呼ばれる、意欲・自尊心・粘り強さ・仲間と協力する力が不可欠であると考え「子どもから出発する保育」を心がけています。　合掌

山内短信

◎縁起看板「中野長者鈴木九郎のものがたり」完成

成願寺開基・鈴木九郎の墓地脇に、当山の縁起物語を紹介する看板が完成。作画は前田康成氏が、文字は多くの檀信徒・有縁のご寺院様方が数行ずつ毛筆で書いてくださり、つなぎ合わせて仕上げました。ご参拝の際にはぜひご覧ください。

◎「祈り写仏の会」展覧会の報告

春彼岸の間、本堂地下にて写仏の会の展覧会を開催しました。会期中、のべ三百名の方が見学においでになりました。写仏の会は毎月第三土曜日（十二時三十分～十七時）、安達原千雪先生にご指導をいただいています。どなたでもご参加いただけます。詳細は寺務所までお問い合わせください。

◎中野たから幼稚園在園児ご家族の協力による災害支援の報告

昨年八月に発生した台風十号は、進路を複雑に変えながら岩手県大船渡市に上陸。各地に甚大な被害をもたらしました。被災地で支援活動を行なうＮＰＯ法人ＮＡＬＵの会よりの要請で、片付けの際に使用するタオルを幼稚園在園児のご家族より多数お寄せいただき送付しました。ご協力ありがとうございました。

上＝本堂での箱詰めの様子
下＝被災地に到着したタオル

◎「関東藤白鈴木会」勉強会のお知らせ

鈴木九郎の先祖は、古事記の時代にさかのぼり、主に紀州熊野本宮の神職を務めていたようです。熊野古道の入口にあたる藤白神社（国の指定史跡）に神官として移り住んだ鈴木氏はここを拠点に熊野権現信仰を全国に広めました。その鈴木氏を先祖に持つ子孫の会が藤白鈴木会です。毎年勉強会と秋に総会を開いています。来る七月八日午後、当山において勉強会を開催。講演は「房総の鈴木氏」、講師は伊藤崇晋氏です。お問い合わせは、連絡人・鈴木俊也（〇三-三三三二七-二六六二／〇九〇-六九三六-〇五六三）。